

# 『平家物語』における武士の「名」について

于 君

The Na of Samurai in Heike Monogatari

YU JUN

## 一、はじめに

「武士」について語る際、多くの研究者が「名」または「名譽」という語を用いて語っている<sup>(1)</sup>。このことは、「名」(「名譽」)を重んじる武士の気質が、「武士」論においてかなり重要な問題だと研究者が考えていることを示唆するだろう。

『平家物語』<sup>(2)</sup>では、「名こそ惜しけれ」「後代に名をあげたり」といった表現に見られるように、「名」<sup>(3)</sup>を惜しむ武士の姿が描かれている。それ以外にも、特に戦の記述の場面で、「名」「高名」「名乗る」「面目」など、「名」に関わる言葉が多出する。本稿は、そうした戦闘場面に出てくる「名」または「名」と関わる言葉に着目し、それがいかなる状況において、武士の行動に影響を与える要素として語られるのかを具体的に究明するとともに、この時期における「名」の意味を明らかにすることを目的とする。

## 二、先陣争いと「名」

『平家物語』には、命懸けで、あるいは同士討ちをしてまで先陣<sup>(4)</sup>を争う武士の姿が描かれている。義経と義仲両軍が宇治川を挟んで対戦する場面で、同じく義経側の武士である梶原源太景季と佐々木四郎高綱は先陣を競って川を渡る。最初に、梶原が一段ほど先に進んだが、佐々木の「此河は西国一の大河ぞや。腹帯ののびて見えさうは、しめ給へ」(巻第九「宇治川先陣」)という策略に乗せられ、馬の腹帯を締めている間に追い抜かれ、つい先陣を取られてしまう。ここには、味方を騙してまで先陣を取ろうとする佐々木の姿が描かれている。そして、その理由は、梶原

の「高名せうどて不覚し給ふな」という一言から見えてくる。つまり、先陣を取ること、手柄をたてることに繋がるのである。

宇治川で義仲軍を破った後、源頼朝は、まっ先に使者に「佐々木はいかに」と尋ねた。そして合戦の記録を開いて見ると、「宇治川の先陣佐々木四郎高綱、二陣梶原源太景季」と書かれていた。先陣を取った武士の「名前」がそこには記録されていたのである。武士にとって先陣を争うことは何を意味したのか。『平家物語』注釈者市古貞次は、「二之懸」章の末尾に、「先陣の功をなんとかして得たいと思う武士の姿が描かれる。戦場での先陣が、後々まで武士としての評価にかかわり、恩賞にも結びつくため、これにこだわらざるを得なかったのである」<sup>(5)</sup>と解説している。先陣争いに勝利した武士は、その「名前」が記録され、後に「評価」や「恩賞」が与えられたのである。

## 三、死に方と「名」

戦の中で、武士は死に直面した際、いかに死んでいったのか。『平家物語』には、主に討死、自害、入水といった三つの死に方が記されている。では、それぞれ異なる死に方において、武士の何が描かれたのだろうか。たとえば、「都をば源氏がためにせめおとされ、鎮西をば維義がために追ひ出さる。綱にかかれる魚のごとし。いづくへゆかばのがるべきかは。ながらへはつべき身にもあらず」<sup>(6)</sup>と云い、入水した平清経に代表されるように、一門の前途をはかなみ、未来への諦観があったため死んでいく平氏武士の姿が、そこには描かれている。他方、討死と自害の場面からは、それと全く異なる武士の気質がうかがえる。

### 三一、討死

木曾義仲の乳母子である今井兼平が死んだ後、今井の兄である樋口次郎兼光は都に入って討死しようとした。樋口の部下の中に茅野太郎光広という武士がいた。彼は敵軍の中に入り、必ずや甲斐の一条の次郎殿と戦いたいと叫ぶが、その理由は、

おととの茅野七郎それにより。光広が子共二人、信濃国に候が、「あつぱれわが父はようてや死にたるらん、あしうてや死にたるらん」となげかん処に、おととの七郎がまで打死して、子共にたしかに聞かせんと思ふためなり。」<sup>1)</sup>

と叙述されている。これは、戦の中で勇ましく討死することが立派な死に方であることを示すものである。かつ、このような立派な討死を証人を通して子供に聞かせることが、「家」の父としてのプライドを保つことであると語られるのである。武士にとっていかに死ぬか、その死に方こそが、大変重要な問題として、『平家物語』において描き出されているのである。

### 三二、自害

義経軍に追い詰められ、木曾義仲は乳母子の今井四郎と二人きりになる。今井兼平が、戦いに疲れきった義仲に向かって「あの松の中で御自害候へ」（巻第九「木曾最期」）と自害を勧め、「弓矢とりは年来日まいかななる高名候へども、最後の時不覚しければ、ながき疵にて候なり」と述べる。この「疵」とは、つまらない人の家来に組落とされて討たれた後、「さばかり日本国にきこえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしが郎等のうち奉ったる」（巻第九「木曾最期」）と言われることを指す。ここでは、忠実な部下である今井にとって、自害は主人義仲の今までの「高名」を保つための方法として描かれる。さらに、義仲が自害に失敗して討ち取られ、今井自身が自害しようとする場面は、次のように描かれている。

太刀のさきにつらぬきたかくさしあげ、大音声をあけて、「此日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば、三浦の石田の次郎為久がうち奉ったるぞや」とのりければ、今井四郎いくさしけるが、これを聞き、「今は誰をかばはむ

とてかいくさをもすべき。これを見給へ、東国の殿原、日本一の剛の者の自害する手本」とて、太刀のさきを口にふくみ、馬よりさかさまにとび落ち、つらぬかッてぞうせにける。<sup>2)</sup>

主人義仲が討たれたことは、今井に戦を止めさせ、自害へと導いた直接の理由として描かれている。五味文彦・櫻井陽子編『平家物語図典』では、今井のこのような自害を「結局、自死の動機は将来への諦観や喪失感にあった」<sup>3)</sup>と述べているが、筆者はそれに加えて、この動機とも関わる自害の「仕方」そのものにも注目したい。彼は源頼政のように「太刀のさきを腹につきたて、うつぶさまにつらぬかッて」（巻第四「宮御最期」）自害するのではなく、「太刀のさきを口にふくみ、馬よりさかさまにとび落ち、つらぬかッて」自害したのである。このような自害の仕方を選んだ理由は、彼の最期の言葉からうかがえる。今井にとって、残酷であるほどに壮絶な自害の仕方は、敵に討たれる恥から逃れ、「高名」を保つだけではなく、「日本一の剛の者」という、評判としての彼の「名」を、さらに揚げることもなったのである。

### 四、「名」とは何か

上述したように、武士の「名」を求めるあり方が、『平家物語』において、必死の先陣争い、立派な討死、壮絶な自害などの姿で表出されている。では、「弓矢とる身はかりにも名こそ惜しう候へ」（巻第四「信連」）と語ったような、武士がこだわった「名」とは、それぞれ何を意味していたのか。それを考えるにあたって、まずは「名」の辞書的な定義から見ておこう。

『日本国語大辞典』では、基本的に「名」を、名前、名称（呼び方）、評判、名譽、名声、虚名、名分、名目などといった熟語で意味づけている<sup>4)</sup>。このように、辞書に見られる「名」は多義的で、掴み難い概念である。また、森三樹三郎は『名』と「恥」の文化の中で「名」について、①言語・文字としての意味と、②人名に付随した評判・名譽・名声としての意味に分けて考えている<sup>5)</sup>。

『平家物語』における武士の「名」には、上述の辞書的な解釈と森の解釈に当てはまる部分もある。例えば、「名乗る」の「名」には、「名前」の意味が入っている

に違いない。しかしながら、その「名前」は、現代のわれわれにおける、人を識別する記号以上の意味を持っていただろう。重要なのは、「武士の名」が何を意味していたのかということである。武士の「名」が生きた言葉としてどんな意味を有していたかが重要である。

次に、研究書の中で、武士の「名」（または名譽）がどのように言及されてきたかについて、特に思想史、精神史からの言及を中心に概観する。

池上英子は『名譽と順応 サムライ精神の歴史社会学』の中で、古代文学に見られる「名」は、中世のサムライが仲間から良い評判をとりたいという欲望を表わす時にしばしば使われたと述べた上で、「恥」についても言及し、それは「名」とともに名譽が問題になる際の表現として、今日まで一貫して使われている<sup>(10)</sup>、とする。また、政治思想史の丸山眞男は『丸山眞男講義録』第五冊の中で、武士のエートスの内容の一つとして「強烈な名譽感と自負心」を揚げ、「名」を惜しむのは武士のエートスの中核概念だと指摘する<sup>(11)</sup>。社会学の桜井庄太郎は『名譽と恥辱』の中で、名を惜しむという意識は日本封建社会における特殊な社会意識の一つであり、武士階級の勃興―封建社会の形成―に伴って、しだいに著しい存在を示すに至ったと考えられる、とする<sup>(12)</sup>。武士道を研究対象とする日本思想史の小澤富夫『武士行動の美学』では、『平家物語』の中にも描かれる、佐藤嗣信・義仲や今井兼平・義経などの武士をとりあげ、「死の後の名こそ惜けれ」という武士の意識を説明する<sup>(13)</sup>。倫理思想史の相良亨は、「名」と共に「恥」を取りあげ、「名」を追求する姿勢と恥を知る姿勢とは根底において別のものではない」と主張した上で、「名」を求める武士にあるべき姿勢は、既に鎌倉武士において形成されていたと説明している<sup>(14)</sup>。そして、「名」とは何かについて、「今生の武士は、ただ純粹に武士らしい武士であったという名をのみ惜しみ、主君に殉じ主の馬前に討死をするのであった<sup>(15)</sup>」と批評する。同じく倫理学の菅野覚明は『武士道の逆襲』のなかで、「勝ちがなければ名は取れぬ」という一章を設け、「武士の重んずる『名』とは、武功、名譽、評判などさまざまな意味合いを含む言葉であるが、その根本は、端的に個人の名前（固有名詞）を指している<sup>(16)</sup>」と主張した上、それは実力<sup>(17)</sup>の表現の一つだととらえている<sup>(18)</sup>。

以上、それぞれ異なる研究の立場に立つ六名の研究者は、いずれも、「名」を惜

しむことを武士の主要な精神の一つだと認識している。ただ、菅野覚明以外、「名」についての明確とした解釈は未だなされていないのが現状である。また、菅野覚明の「名」についての定義の中にある「評判」とは、いかなる文脈において、どのような基準で、誰によってなされるのか、その答えも必ずしも明瞭ではない。また、池上が「名譽」は「名」という語によって表現されることを指摘したのは、『honour/honor』の訳語としての「名譽」を「名」に適用させたためである。一方、菅野は池上と逆に、「名」が「名譽」に置き換えて得ることを示している。このように、そもそも「名」と「名譽」の相互置換の可能性においても曖昧が見られるのである。そうした先行研究の成果をふまえつつ、本稿では、『平家物語』に多出する「名」の言葉のあらわれ方それ自体に着目し、再度『平家物語』の本文に即して、「名」の意味について検討することを課題とする。

## 五、『平家物語』における武士の「名」

### 五―一、「姓名・身分」としての「名」

「敵をうつといふは、我もなのツてきかせ、敵にもなのらせて頸をとったればこそ、大功なれ。名も知らぬ頸とツては、何にかし給ふべき<sup>(19)</sup>」に見られるように、『平家物語』の武士は、敵を討つ前に名乗ること<sup>(20)</sup>が求められた。では、そもそも「名乗る」とは、どのように定義されているのか。『角川古語大辞典』（第四卷）では、「名乗る」について、「自分の名・身分・素性などを告げ知らせる（…中略…）中古以降、名対面、合戦などの場においては、一定の形式に従い高らかに姓名などを宣言する名乗が行なわれた<sup>(21)</sup>」と定義している。前に述べた森の論述に合わせて考えると、『平家物語』の武士がこだわった「名」とはまず、第一義的に、言語・文字に表現され、しかも合戦場面でお互いを対等の者<sup>(22)</sup>として確認し合い、自分が相手にふさわしいものとしての姓名・身分であると言つてよいだろう。

### 五―二、よき評判としての「名」

「命を惜しまない」という評判

名乗ることが、戦の現場で求められる一方、死ぬまで名乗らなかつた武士もいる。

実盛は「さてはたがひによい敵ぞ。但しわ殿をさぐるにはあらず、存ずるむねがあれば名のまじいぞ」(巻第七「実盛」と言つて、討たれるまで名乗りなかつた。その理由は、富士川の合戦で、矢一本も射ずして逃げたという人生の中で唯一の恥が残っていたからである。戦で逃げることは「命を惜しむ」行動に等しく、武士にとって最も恥すべき行為である。したがって、「実盛」という名前を敵に知られたら、「戦わずに逃げた」と笑われるだろう。これは実盛にとつて耐えられない恥であり、実盛という名前に対する毀損でもある。彼が「赤地の錦の直垂」を着用して見事に討死し、一度恥で汚れた「実盛」という名前をもう一度誉れ高きものにするためには、汚れた自分の名を、一度は隠す必要があつたのである。そして、一点の恥があつた「実盛」という名前さえ世の人に知らなければ、彼のそれまでの汚点のない清い姿を、そのまま世の人と自分自身の中で維持できる、と考えたのである。汚点のない清い姿こそ、まさに実盛が重んじた本来の「名」の意味であろう。すなわち、「実盛」という名前に示されたこれまで<sup>〔二五〕</sup>汚点のなかつた、主として「命を惜しまない」武士らしい武士という評判としての、「名」である。

### 「二人当千、剛の者」という評判

前述したように、先陣を取つて成功した武士は、名前が合戦日記に記録され、後ほどの「恩賞」にあずかる。しかし、先陣争いに失敗した武士には、「恩賞」が得られない。それでも、積極的に討死しようとする武士がいる。では、討死した武士は、どのような「名」を獲得できるのか。

河原兄弟が、決心の一番乗りを試みようとした時、次のように描かれている。

河原太郎弟の次郎をようでいひけるは、「大名は我と手をおろさねども、家人の高名をもつて名譽す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。かたきまへにおきながら、矢一つだにも射ずしてまちあたるが、あまりに心もとなう覚ゆるに、高直はまづ城内へまぎれ入つて、一矢射んと思ふなり。されば千万が一つもいきてかへらん事ありがたし。わ殿はのこりとどまつて、後の証人たて」といひければ(…中略…)下人どもよび寄せ、最後の有様妻子のもとへいひつかはし……<sup>〔二六〕</sup>

ここには、死の覚悟を持ち、自分の手で手柄を立て、千万の敵陣に矢一本を射て一番乗りを決めた河原太郎の姿が描かれている。このように、死を以てして一番槍をしようとする河原太郎が何を求めているのかは、後に平知盛がその首を見て、「あッばれ剛の者かな。これをこそ一人当千の兵ともいふべけれ」(巻第九「二度之懸」と言ったこと)からうかがえる。つまり、危険な中で一番槍をして、そして立派に戦死したのは「剛の者、一人当千の者」だという目に見えない評判のためである。この評判こそが、彼らが求める「名」の意味だつたと考えられる。

## 六、主従関係・「家」における「名」

### 六一、主従関係と「名」

武士において、「名」が意識されるのは多くの場合、直接的、間接的に、主従関係に結びつく場面においてであつた<sup>〔二七〕</sup>。相良亨も前掲「武士道」の中で、「名」を追求する武士の精神構造を主従関係において考察している。と同時に、実盛の「名」を求める場面を例に、「武士はその武功の名を、敵味方をこえて、その主従の場をはなれて、したがってまた経済的利益をこえて求めたことが明らかである。武士がその名・恥を問題にする時、彼は一個の武士としてあつた」<sup>〔二八〕</sup>とも論じている。

相良はまた同書の中で、「……武士の歴史全体を通してみる時、一個の武士としての武士らしさが問題になる時、それは必ずしも主従関係における武士としてのあるべきあり方に吸収されることなく、そこからはみ出る、時に矛盾するものとして捉えられるものであつたといふことである」<sup>〔二九〕</sup>とも述べている。すなわち、主従関係における武士のあるべきあり方が要求される一方、時に主従関係において説明がつかないような武士の行動があることを、相良は指摘する。そうした武士も、一個の武士として見れば、武士らしい武士だ、というのである。相良が指摘したのは、主従関係においてだけでは、武士の武士らしさを十分に分析し得ないという点である。

そうした言及をも視野に入れつつ、ひとまずは、武士の「名」を求める姿勢を、再度、主従関係において考えることから始めてみたい。最初の例は、射られた副信が死ぬ直前に義経に語る言葉である。

さ候はでは、弓矢とる者の、かたきの矢にあたつて死なん事、もとより期する処で候なり。就中に、『源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひける者、讃岐国八島のおそにて、主の御命にかはり奉つてうたれにけり』と、末代の物語に申されむ事こそ、弓矢とる身には今生の面目、冥途の思出にて候へ<sup>(三〇)</sup>。

主人の命に代わつて死んで、末代までの話題になるのは、弓矢を取る身にとつての「面目」だと、嗣信は言ったのである。前文に述べたように、いかなる死に方をするかは、武士の「名」の獲得と関係することだからである。主人のためではなく、普通に勇ましく戦つて死んだ場合、嗣信は「勇ましい武士」だという評判は後世にもしばらくは残るかもしれないが、末代までの話題とはならない。固い絆で結ばれた主従関係が『平家物語』で高く評価される中で<sup>(三二)</sup>、嗣信は主人の命の為に勇ましく戦つて死んだからこそ、人々の話題になり、そして「勇ましく、主人に忠実な嗣信」という、より高い評判、「名」が広まつていくと考えられたのである。戦で命を惜しまず、勇ましく戦つて死ぬのは、本来武士らしい武士としてあるべき姿である。これも嗣信が求める「名」のある武士の姿である。そして、ここに見られるように、一個の武士として、固い主従関係において、そしてそれが戦の中で雄壮な死として実現したからこそ、嗣信の「名」はさらに一段高いレベルに至つたのである。

#### 六一、「家」と「名」

武士が「名」を問題にする時、主従の場を離れた一個の武士としてあつたことは、すでに相良に指摘されている。しかし、その「一個の武士」は、そもそも何に帰属する存在だったのか。「名」を求める武士の姿勢を、武士の「家」<sup>(三三)</sup>との関係において考える必要があるだろう。

以下、武士が「名乗る」いくつかの場面を列挙する。

〔場面一〕佐々木高綱が宇治川先陣を取つた時に名乗つた内容（巻第九「宇治川先陣」）

宇多天皇より九代の後胤、佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや。われと思はん人々は高綱にくめや。

〔場面二〕今井兼平が敵に挑戦の言葉を投げつけた話（巻第九「木曾最期」）  
日來は音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。木曾殿の御めの子、今井の四郎兼平、生年卅三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までもしろしめされたるらんぞ。兼平うって見参にいれよ。

〔場面三〕梶原景時が息子の為に再び敵陣に入った時に名乗つた内容（巻第九「二度之懸」）

昔八幡殿、後三年の御たたかひに、出羽国千福金沢の城を攻めさせ給ひける時、生年十六歳でまさきかけ、弓手の眼を甲の鉢付の板に射つけられながら、答の矢を射て其敵を射おとし、後代に名をあげたりし鎌倉権五郎景正が末葉、梶原平三景時、一人当三十の兵ぞや。我と思はん人々は、景時うって見参にいれよや。

上に引用した三つの例から、『平家物語』に描かれた武士が「名乗る」際、本人の名前・身分を名乗ると同時に、条件さえ許されれば、自分が属している「家」の先祖の名前と、「家」の先祖が勝ちとつた功績も並べ立てていることが明らかになる。武士の「名」と「家」との関係について、場面三<sup>(三五)</sup>を中心に考えてみよう。

「鎌倉権五郎景正が末葉、梶原平三景時」という一言は、多くの意味を含んでいる。

第一に、「梶原」の名字は、八幡殿（源義家）家以来現在に至るまで、代々源氏の嫡流とともに幾多の合戦を戦つてきた一族であることを意味している。そして、梶原一族の先祖は、わずか十六歳で、先頭を進み、左の目を甲の鉢付の板に射つけられながら、返しの矢を射て、その敵を射落とし、後代まで名をあげた鎌倉権五郎景正（平景正）である。第二に、五代後の子孫である景時もその栄えある名の一字「景」を負っていることである<sup>(三六)</sup>。当時の武士が重んじた「名」とは、このような重層性を持つていたのである。「名乗つた」のは、戦場で自分を際立たせるためであるが、しかし、ただ自分の姓名や身分を名乗つただけではまだ不十分である。さらに、自分の名に裏付けられている先祖代々から伝わつた財力・功績・評判など、武士の「力」が必要とされる。その「力」の集約された究極の一点が、その「家」代々、合戦の中で勝ち続け、保持してきた一族の「名」なのである<sup>(三七)</sup>。上に挙げた「名乗る」三つの場面では、「名乗る」際、如何にして自分を際立たせるのかを工夫する武士

の姿が描かれている。自分を際立たせる武士の「名」は、その武士本人のものでありつつ、同時に、遠く昔から続いてきた「家」一族の「名」でもある。前例で挙げた実盛は源平の二人の主人に仕えたことがあり、彼の「名」を求める場面には、確かに相良亨が述べたように主従関係を越えたものがある。しかし、それは彼の名前が「家」に裏付けられた「力」によって続いてきたことは矛盾しないものである。

## 七、平家方の武士にとっての「名」の問題

### 七―一、平知盛にとつての「名」

ところで、ここまで取りあげた梶原源太景季、佐々木四郎高綱、茅野太郎光広、今井四郎兼平、信連、齋藤実盛、河原兄弟、嗣信、梶原景時は、すべて坂東武者（又は源氏方の武士）<sup>(三六)</sup> についての描写である。では、「名」を重んじる武士の気質は、平家方の武士については語られなかったのだろうか。

壇ノ浦の合戦の一場面で、新中納言知盛卿は武士たちを励ますために「いくさはけふぞかぎり、者どもすこしもしりぞく心あるべからず。天竺、震旦にも日本我朝にもならびなき名将勇士といへども、運命つきぬれば力及ばず。されども名こそ惜しけれ。東国の者共によわけ見ゆな。いつのために命をば惜しむべき。これのみぞ思ふ事」（巻第十一「鷄合 壇浦合戦」と語る。ここには、「名」を惜しんで積極的に戦つていこうとする平知盛の姿が描かれている。と同時に、平知盛の「名」を惜しむ姿勢には、坂東武士の死に際する時の「名」を惜しむのとは異なる側面も見られる。

すなわち、「天竺、震旦にも日本我朝にもならびなき名将勇士といへども、運命つきぬれば力及ばず」とあるように、「名」を惜しみながらも、運命が尽きてしまうことに対する無力感が、そこからは感じ取れる。これは知盛が海に飛び込む前の言葉「見るべき程の事は見つ。いまは自害せん」（巻第十一「内侍所都人」）からも分かる。平家の中で最後まで奮戦した勇将能登守教経が死んだ後、もはや平家一族の運命は救われないと自覚したからこそ、知盛が入水したのである。また、名乗り方においても、平家方の武士<sup>(三七)</sup> に比べ、坂東武士の堂々と大きい声で名乗った場面の方が、圧倒的に多く見られる。平家方の武士の「名」を惜しむ姿勢は、坂東武

者に見られた、死の危険を犯した先陣争い、立派な討死や壮絶な自害など、極めて積極的と言つていいほど「死」を以て「名」を求める気質とは、明らかに異なるものとして、叙述されているのである。

この違いは、「死」に直面した際の思想、たとえば無常観とも関わるものである。例えば、一ノ谷の合戦で、平家方の大将忠度は、これまでと違い、「しばしのけ、十念となへん」（巻第九「忠度最期」と言い、西に向かつて、十遍ほど念仏した後、討たれる。このように、死に際する時に、坂東武士に見られるように、「名」を保つために自害または立派に討死するのではなく、仏教信仰心に支えられ、運命に任せて打たれるのを静かに待つ平家方の武士の淡々とした美しい姿が、『平家物語』には他方、描かれているのである。

### 七―二、平知盛の懺悔

他方、上述したような「名」を惜しむ平知盛も、一度戦で逃げて恥を残した実盛と同様、かつて「名」に相当しない生き方（「命を惜しむ生き方」）を選んだとするエピソードが、『平家物語』には記されている。

息子、平知章に助けられて死を免れた平知盛は、後に平宗盛の前で

武藏守におくれ候ひぬ。監物太郎うたせ候ひぬ。今は心ほそくこそまかりなつて候へ。いかなれば子はあつて、親をたすけんと敵にくむを見ながら、いかなる親なれば、子のうたるるをたすけずして、かやうにのがれ参つて候らんと、人のうへで候はばいかりもどかしう存じ候べきに、我身の上になりぬれば、よう命は惜しい物で候ひけりと、今こそ思ひ知られて候へ。人々の思はれん心のうちどもこそ恥づかしう候へ<sup>(三八)</sup>

と長々と懺悔の言葉を述べて泣く。彼の言葉にある「命を惜しむ」という、前文で述べたように、まったく「名」を重んじるとは言えない知盛の行動について、『平家物語』では、全く非難していない。逆に、この懺悔を聞いた平宗盛の態度と彼が発した言葉を介して、「武藏守の父の命にかはられけるこそありがたけれ。手もきき心も剛に、よき大將軍にはおはしつる人を」と、息子知章の「孝」と勇猛さを讃

美する。つまり、この場面で強調されたのは、「名」の問題ではなく、生死の境に立った際の、平知盛の人間の生への執着と利己心への反省の素直さと、子の父への「孝」という問題だったのである。

## 八、おわりに

「名」を重んじる武士の気質が、『平家物語』において、先陣争い、討死、自害といった場面でいかに語られているかについて、以上、詳論してきた。そして、その「名」とは、主に①言語・文字に表現され、しかも合戦場面でお互いを対等の者として確認し合い、そして自分が相手にふさわしいものとしての姓名・身分である意味と、②特に「命を惜しまない」、「剛の者、一人当千の者」という良い評判としての、二つの意味を有するものだった。

また、武士が追求した「名」は、一個人としての「名」であると同時に、昔から「実力」によって築きあげてきた、「家」の「名」でもある。そして、その「名」への追求が主従関係において語られる際、武士はさらに高い評判としての「名」を獲得したのである。

『平家物語』中、源氏方の武士と比べ、平家方の武士には「名」を重んじる姿がそれほど描かれていないが、平知盛の例に見られるように、彼は「名」を重んじながらも、無常観という仏教信仰に伴われ、運命に対してはある程度の順応が見られる。坂東武者に見られない平家方の武士の特徴として、描かれたものと理解することが出来るだろう。

ところで、『平家物語』に描かれた武士の姿に、すべてを「名」のみに還元できない面があることも事実である。息子に命を助けられた平知盛の懺悔には、むしろ人間の本性としての生への執着に対する反省や子の父に対する「孝」といった問題が描き出されている。また、嗣信のエピソードで語られたのは、「名」以外に、義経と嗣信の二人に体现される武士主従間の「情」の問題である。そうした「孝」や「情」といった問題とともに、「名」の問題をも考えていくべきであることは言うまでもない。

## 注

- (一) 丸山眞男、相良亨、小澤富夫、菅野寛明、池上英子、笠谷和比古など（後文で紹介する）。
- (二) 本稿の引用は、「東京大学国語研究所蔵の『平家物語』（旧高野辰之氏所蔵。通称、高野本、覚一別本）を用い、覚一系の諸本および元和七年（二六二一）板本（元和版）屋代本、真字熟田本、正節本などを参照」した、新編日本古典文学全集『平家物語』①／②（小学館、一九九四年）による。
- (三) 「名譽」という言葉は、『平家物語』の本文にも出てくるが、管見のかぎり、三ヶ所に限られる。①「頼朝年来勅勘を蒙りたりしかども、今武勇の名譽長ぜるによつて」（巻第八「征夷將軍院宣」）、②「家人の高名をもつて名譽す」（巻第九「二度之懸」）、③「頼朝御武勇の名譽長ぜるによつて」（巻第十二「紺掻之沙汰」）。市古貞次編『平家物語辞典』（明治書院、一九七三年、三二五頁）によると、①と③にある「名譽」は、名聲、よき評判をとることの意味であり、②にある「名譽」は功名、手柄の意味である。
- (四) 先陣を狙う際には、具体的な表現として、「番乗り」と「番槍」のような形がある。
- (五) 『平家物語』②、二二三頁。
- (六) 『平家物語』②、二二〇頁。
- (七) 『平家物語』②、一八四頁。
- (八) 『平家物語』②、一八二頁。
- (九) 五味文彦・櫻井陽子編『平家物語図典』小学館、二〇一〇年、五四頁。
- (一〇) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』（第二版 第十巻）小学館、二〇〇一年、二頁、参照。
- (一一) 森三樹三郎「名」と「恥」の文化」講談社学術文庫、二〇〇五年（初出は一九七一年）、五六頁、参照。
- (一二) 池上英子著、森本醇訳「名譽と順応 サムライ精神の歴史社会学」NTT出版、二〇〇〇年、一六頁、参照。
- (一三) 丸山眞男「丸山眞男講義録」（第五冊）東京大学出版会、一九九九年。
- (一四) 桜井庄太郎「名譽と恥辱」法政大学出版局、一九七一年、三一四頁、参照。
- (一五) 小澤富夫「武士行動の美学」、玉川大学出版部、一九九四年、一一一―一四頁、参照。
- (一六) 相良亨「武士道」講談社学術文庫版、二〇一〇年（初出は一九六八年）、七五頁、参照。
- (一七) 前掲『武士道』、七九頁、参照。

- (一八) 菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、二〇〇四年、六七―六八頁。
- (一九) 自分のすべて(腕力、武芸、知識、才覚、身体能力、財産、家族など)を力に換算したものを指す(前掲『武士道の逆襲』、五四頁、参照)。
- (二〇) 前掲『武士道の逆襲』、七〇―七一頁、参照。
- (二一) 『平家物語』②、二二四頁。
- (二二) 武士の「名乗り」の習慣は、多くの研究者(丸山眞男、池上英子ら)が指摘するように、当時の一騎打ちの戦闘様式の中に形成されたという。一騎打ちの無数の集合体の中で、「名乗る」ことによつて、自分を際立たせるのは、有名な戦士を殺すあるいは成功裏に先陣を取った後の予想できる、報酬と名誉を手にするためである。
- (二三) 岡見正雄ら編『角川古語大辞典』(第四卷)角川書店、一九九四年、八二四頁。
- (二四) 丸山眞男は『丸山眞男講義録』の中で、このような武士間の身分的等質性を意識し合ったものが、一定の手續きに従つてフェアに行なうところのゲーム(生命をかけた厳粛な遊戯的性格)が、武者の道を、無秩序・無規範な略奪的暴力から区別して、武士の自己陶冶の一つの基礎をなしていた、と述べている(同書、七一―七三頁)。
- (二五) 「これまで」という言葉を使ったのは、実盛がこだわったのは、富士川の合戦で逃げる前の彼の姿であるからだ。
- (二六) 『平家物語』②、二二二―二二四頁。
- (二七) 前掲、『名譽と恥辱』、二二頁、参照。
- (二八) 前掲、相良亭『武士道』、九二頁。
- (二九) 前掲、相良亭『武士道』、九二頁。
- (三〇) 『平家物語』②、三五五頁。
- (三一) ここで、主人源義経の為に討たれ、死ぬ直前の従者嗣信の話と、後に義経の嗣信に対する「情」のある行動(嗣信の手を取る、名馬を嗣信の後生を弔つてくれた僧に贈るなど)について、『平家物語』では、「弟の四郎兵衛をはじめとして、これを見る兵者共みな涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、まったく露塵程も惜しからず」とぞ申しける」(巻第十一「嗣信最期」)、と固い絆で結ばれた義経と嗣信のことを高く評価する。その反面、主人平重衡を捨てた盛長について、「あなむさんの盛長や。さしも不便にし給ひしに、一所でいかにもならずして、思ひもかけぬ尼公のともしたるにくさよ」(巻第九「重衡生捕」)、と非難する。
- (三二) ここで使った「家」という言葉について、村上泰亮ら著『文明としてのイエス社会』を参照しながら、少し説明を加える(同書は、分析概念として「イエ」という表現を使用する)。村上らは同書の中で、「イエ」という言葉を、生活を共同にする経営体のある種の独特の類型として使うとする。それは、家族 *family* ではない。また、宗族シ

ステムを形成する中国の「イエ」とも異なる。極端に言えば、一つの共同体である。ただ、その共同体、例えばイエ型集団の特性の一つには、超血縁性がある(筆者注)。次に挙げた例の中で、今井兼平と木曾は乳母子関係、血縁を持たないが、それも木曾一族という共同体としての「家」と見なす。これは、場面二(今井兼平は木曾義仲の乳母子であり、血縁関係を持たない)から伺える。それ以外にも、系譜性、機能的階級制、自立性などの特性がある。これらを一々『平家物語』に合わせて説明することは控えるが、『平家物語』の描かれた時代性を考えると、その中に描かれた武士の「家」は、村上らの「イエ」に近する区分でいうと、「原イエ」の範疇に入るといえる。すなわち、東国型の開発領主を中心とする自己永続的な集団を、畿内・西国型の在地領主と明確に区別した新しい核主体のことである。

(三三) 前掲『武士道の逆襲』の中で、菅野は『保元物語』の中にある場面三と似たようなエピソードを引用して詳しく説明している。以下の場面三に基づいた考察の一部分を、筆者は菅野の論述の仕方を取りながら説明することとする。

(三四) 前掲『名』と『恥』の文化』のなかで、森は「日本では、父の名の一字をとつて子の名にする例が多いが、中国人には夢にも考えられないことである。こんなことをすれば、その子は一生を通じて不孝の罪を背負うことになる」(二二頁)と述べている。日本では、父あるいは先祖の名の一字を取ること、名譽だと考えられたのである。ここからは、日本と中国のそれぞれ「名」に対する認識の違いがうかがえる。

(三五) 前掲『武士道の逆襲』の中で、菅野は武士の名について、「元來武士の名前は、それ自体実力で獲得され維持されてはじめて、固有名として機能する、いわば武士のブランドだったのである」(七〇頁)と述べている。

(三六) 斎藤実盛(一一二一年―一八三年)は打たれた時に平家方の武士ではあるが、越前で生まれて間もなく武藏国の長井(現在の埼玉)に居住していた。それまでは源義朝の部将であった。平氏に仕え始めたのは平治の乱の後(一一五九)である。しかも、平家に仕えていても、武藏にある平家の莊園に住んでいた。したがって、実盛を、かつては源氏方の武士であつて、坂東武士の氣質に相応しい者と見ることもできるだろう。

(三七) 猪俣小平六則綱に「名も知らぬ頭をとつては、何にかし給ふべき」と言われて、「身不肖なるによつて当時は侍になつたる越中前司盛俊といふ者なり」と名乗つた平家方の武士盛俊に見られるように、源氏方の武士のような名乗る時の積極さと自信が見られない。

(三八) 『平家物語』②、二三九―二四〇頁。